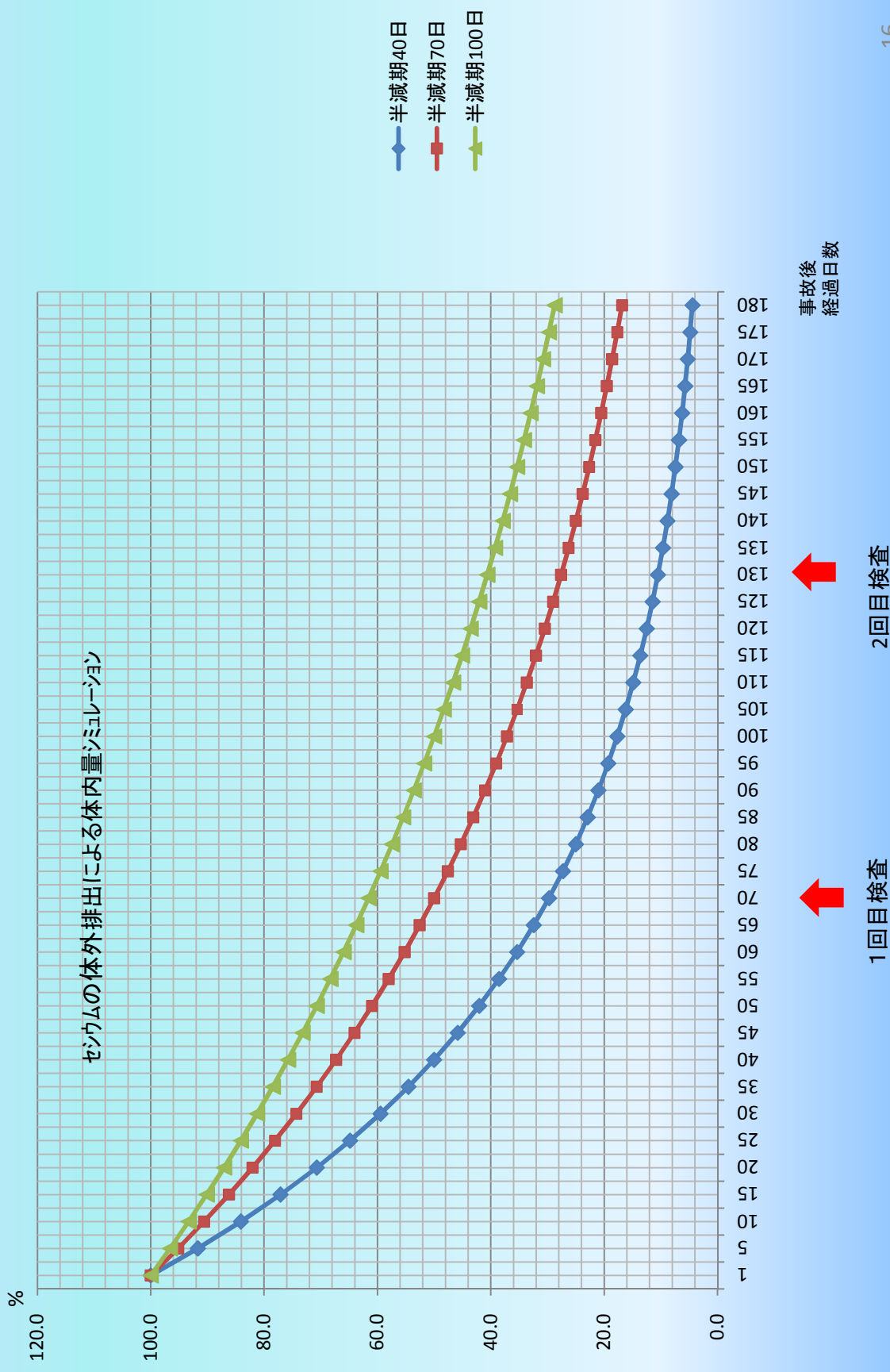


セシウムの体外排出による体内量シミュレーション



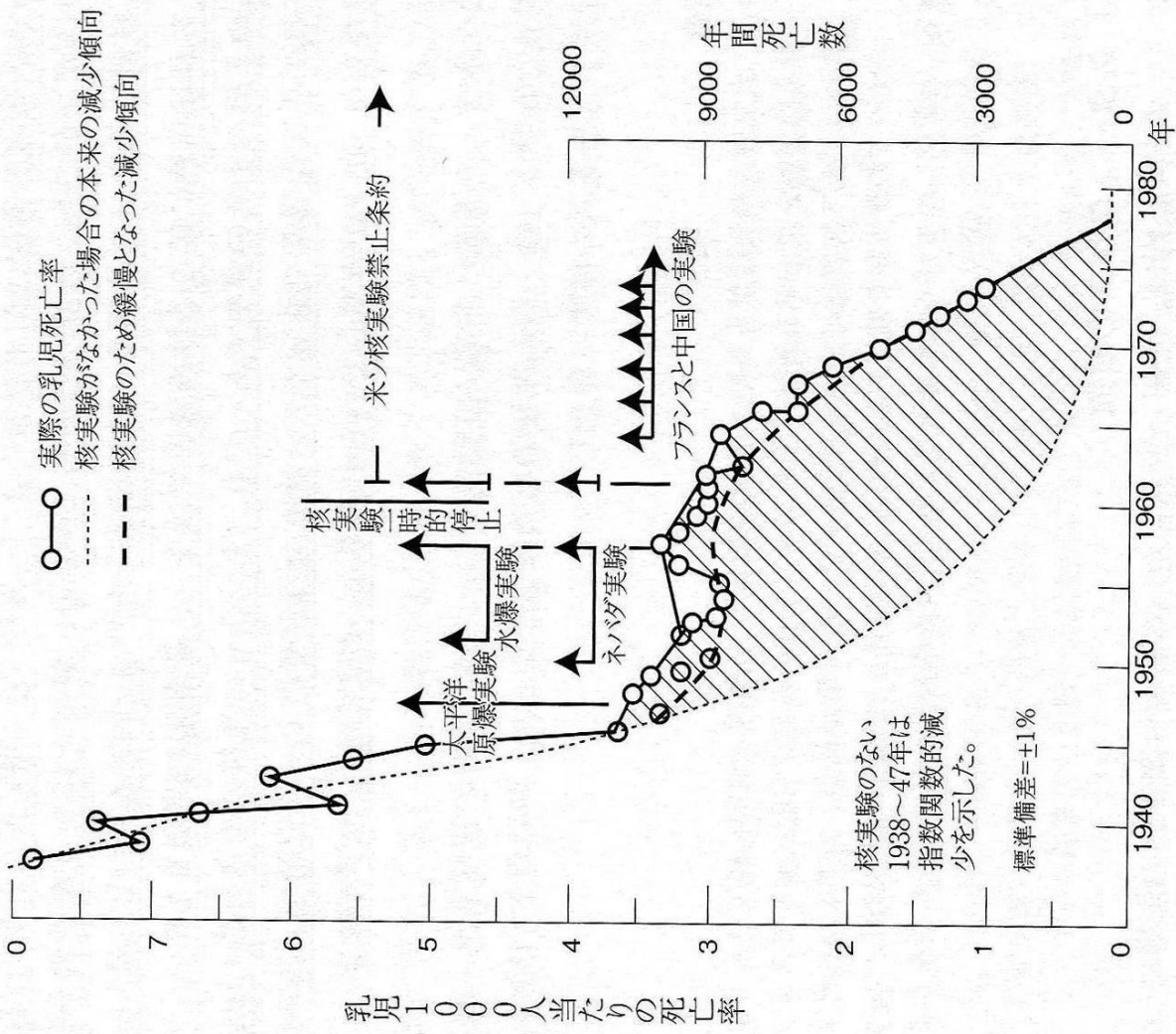
日付	セウムの生物学的半減期のシミュレーション			
	時間(日)	40	70	100
3月13日	1	100.0	100.0	100
	5	91.7	95.2	96.6
	10	84.1	90.6	93.3
	15	77.1	86.2	90.1
4月2日	20	70.7	82.0	87.1
	25	64.8	78.1	84.1
	30	59.5	74.3	81.2
	35	54.5	70.7	78.5
4月22日	40	50.0	67.3	75.8
	45	45.9	64.1	73.2
	50	42.1	61.0	70.7
	55	38.6	58.0	68.3
5月12日	60	35.4	55.2	66.0
	65	32.4	52.5	63.7
	70	29.7	50.0	61.6
	75	27.3	47.6	59.5
6月1日	80	25.0	45.3	57.4
	85	22.9	43.1	55.5
	90	21.0	41.0	53.6
	95	19.3	39.0	51.8

6月21日	100	17.7	37.2	50.0
	105	16.2	35.4	48.3
	110	14.9	33.7	46.7
	115	13.6	32.0	45.1
7月11日	120	12.5	30.5	43.5
	125	11.5	29.0	42.1
	130	10.5	27.6	40.6
	135	9.6	26.3	39.2
7月31日	140	8.8	25.0	37.9
	145	8.1	23.8	36.6
	150	7.4	22.7	35.4
	155	6.8	21.6	34.2
8月20日	160	6.3	20.5	33.0
	165	5.7	19.5	31.9
	170	5.3	18.6	30.8
	175	4.8	17.7	29.7
9月9日	180	4.4	16.8	28.7

・元ピッツバーク大スターンゲ
ラス教授は米国における肺炎、
インフルエンザによる乳児死
亡率と核実験の影響を指摘し
ている。

「人間と環境への低レベル放射
能の脅威」
ラルフ・グロイブ／アーネスト・ス
ターンゲラ著 より

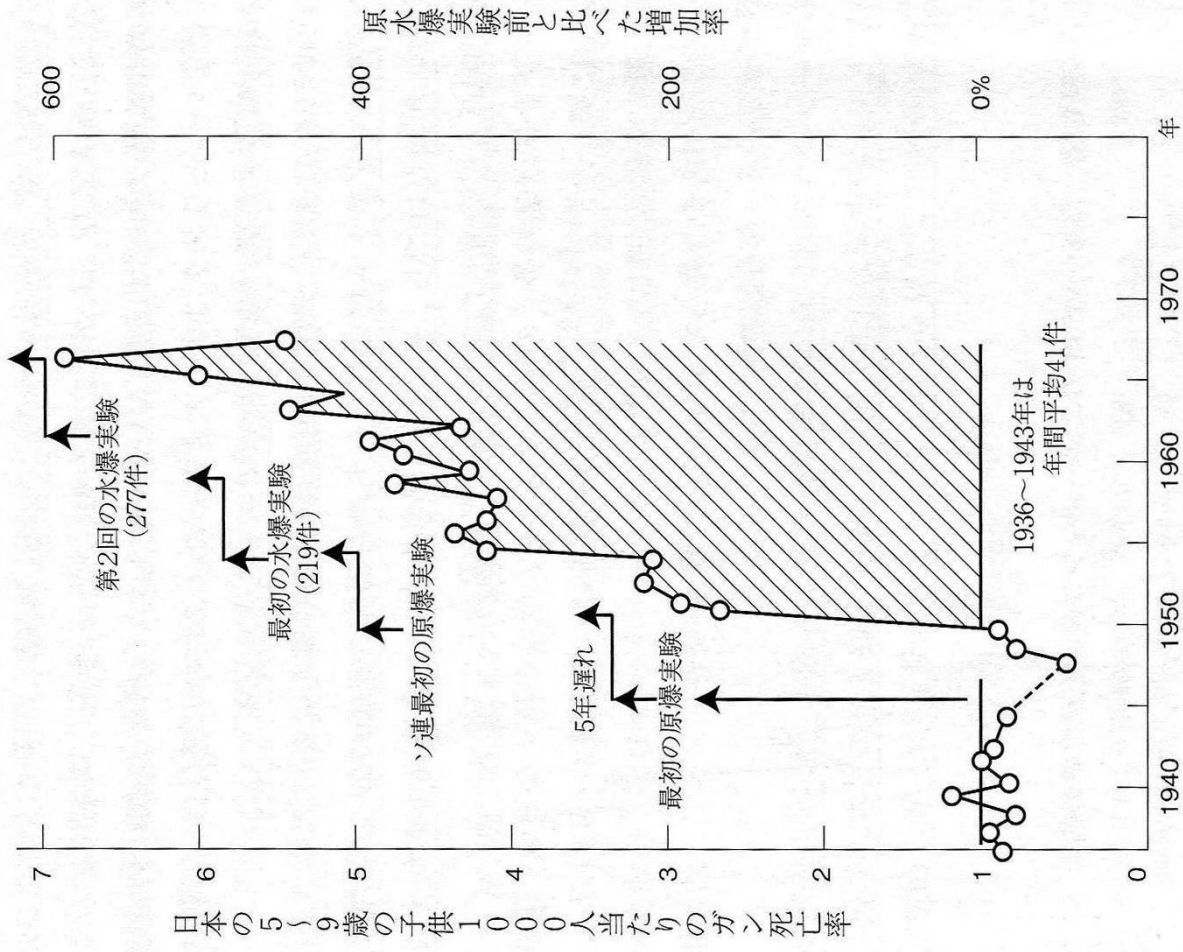
第5図 米国における肺炎とインフルエンザによる乳児死亡率



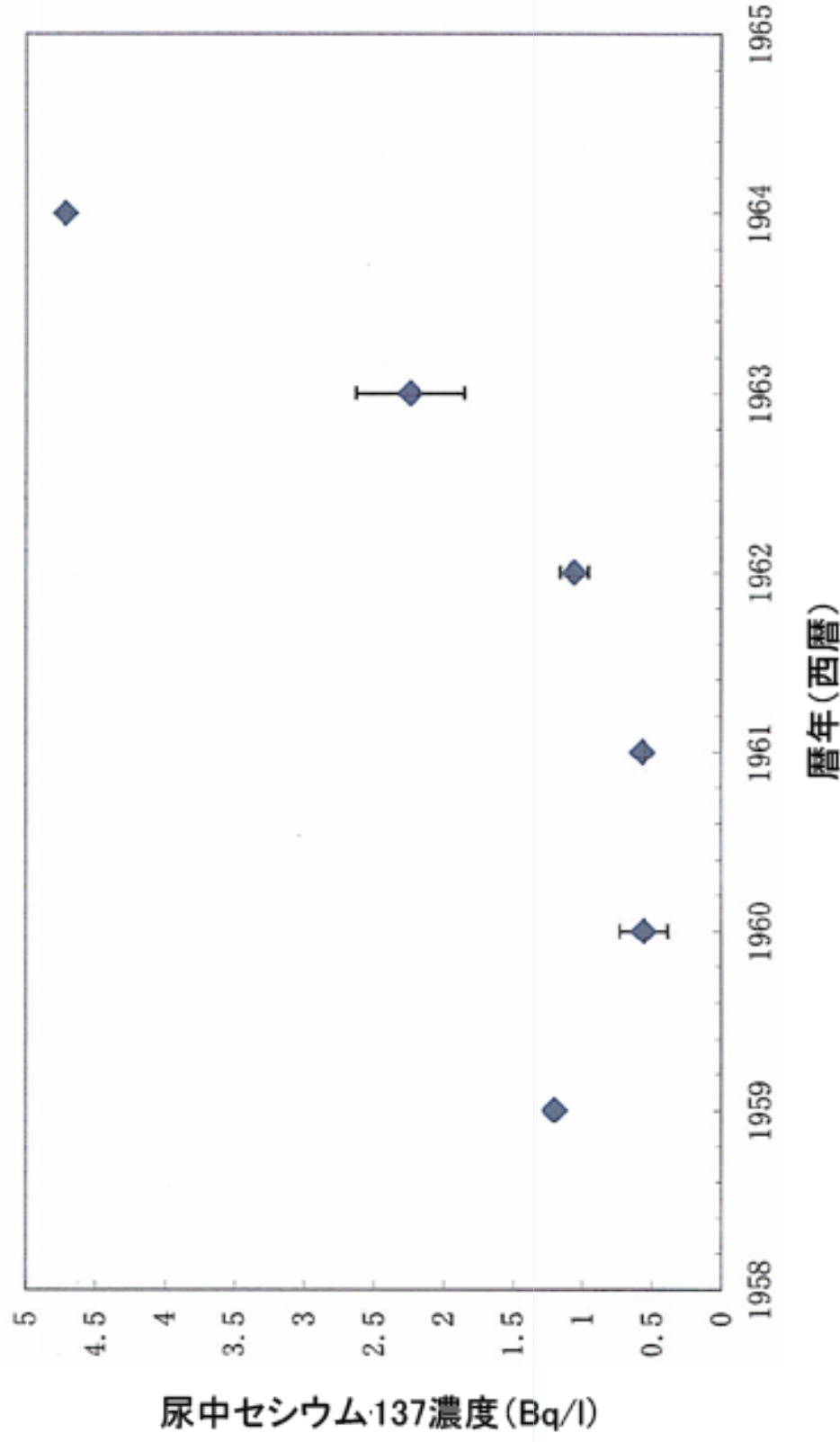
・スターングラスは日本
の子どものガンの死亡
数と核実験との関係を
指摘した。

「人間と環境への低レベル
放射能の脅威」
ラルフ・グロイブ／アーネス
ト・スターングラス著 より

第7図 5～9歳の日本の子供のガンの死亡率*2



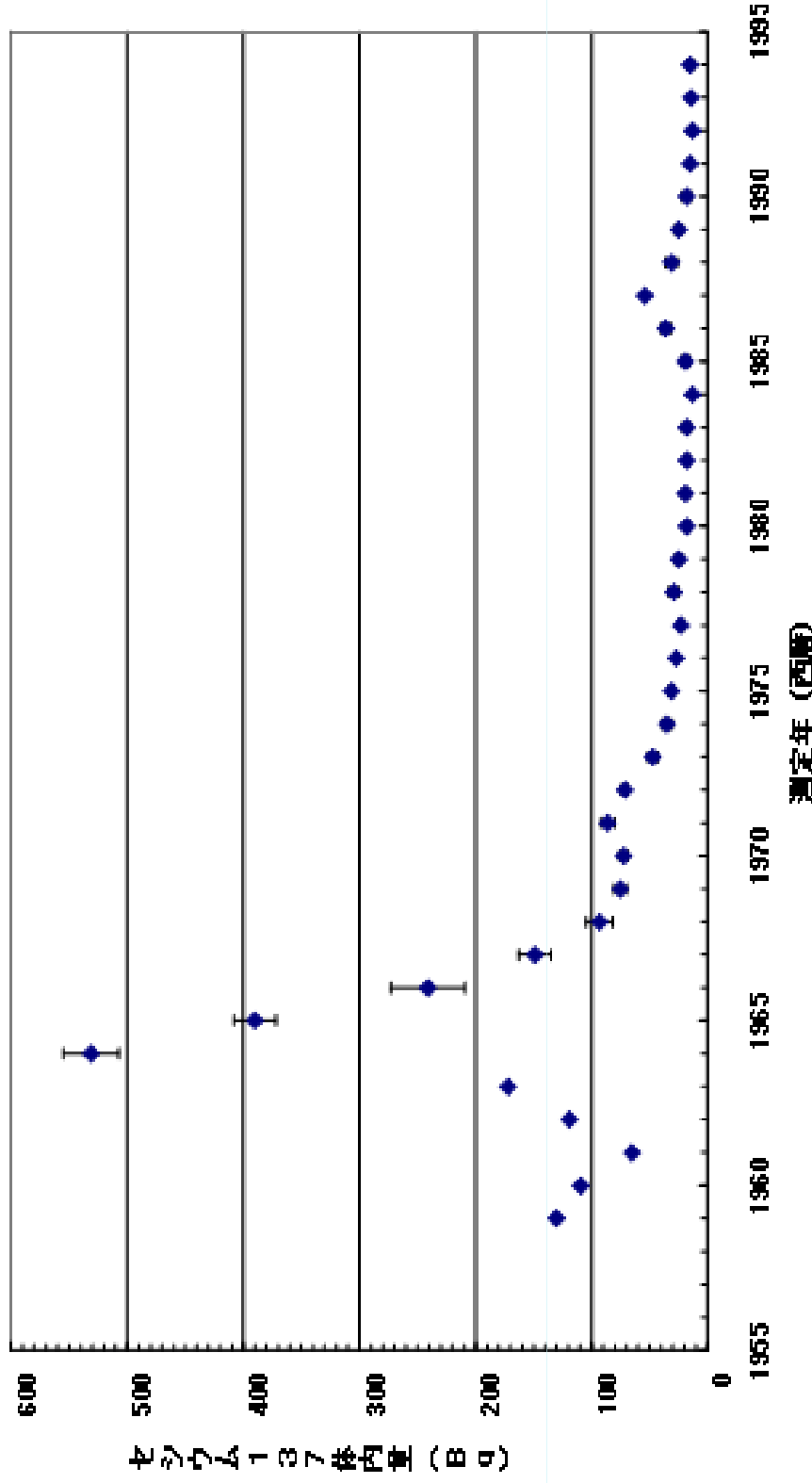
出典：瀬木他、日本癌学会



文献3,4,5にpCi/l表示で記載された数値をBq/lに換算して本図を作成

図2 日本人中学生尿のセシウム137濃度の推移
(1959-1964年)

[出典] Journal of Radiation research 3(1962), Survey Data in Japan 3(1964)、ibid. 6(1965)

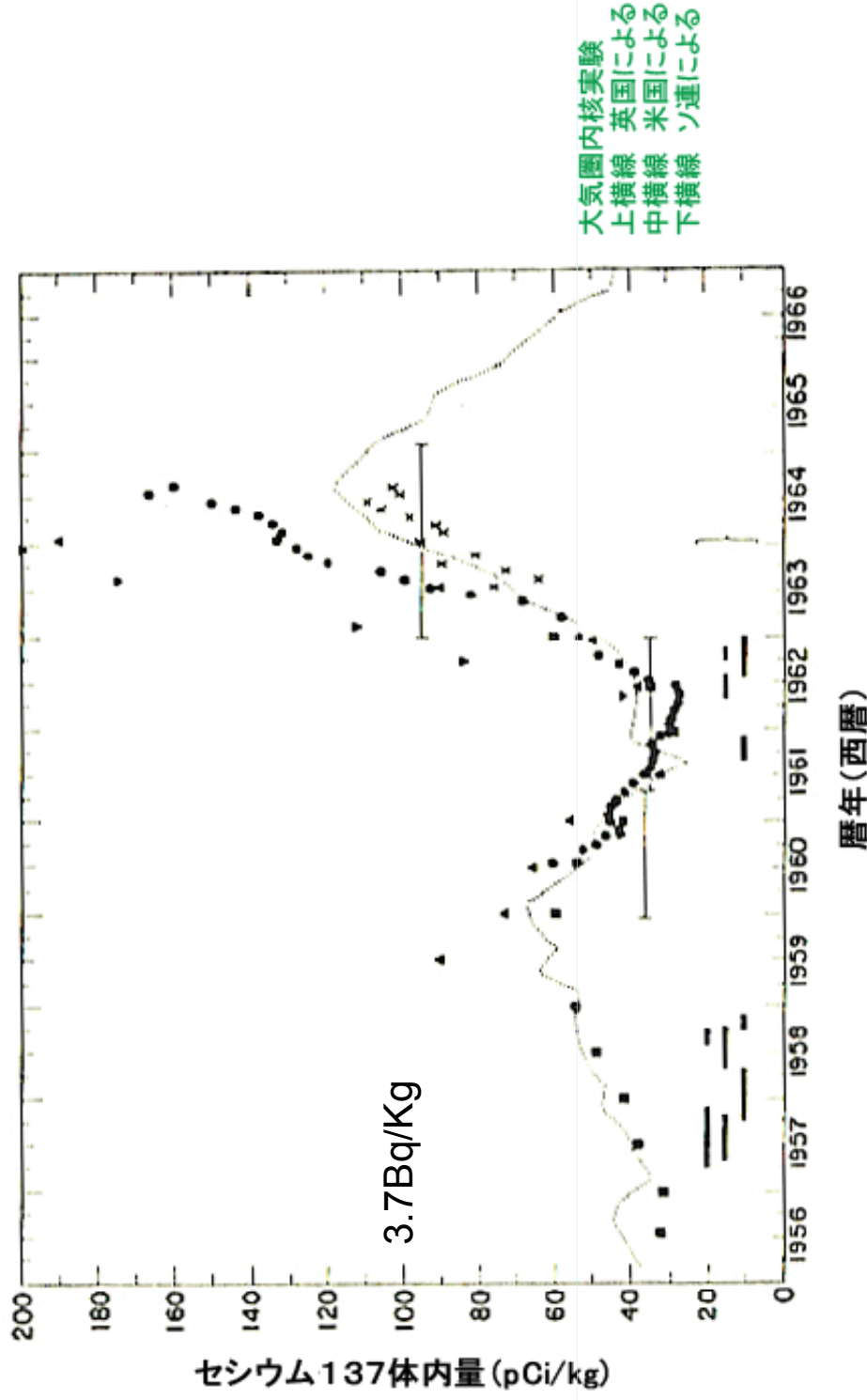


(1959-1994)

下記出典のFig.2の不要部分を消し、1994年値を追加し、さらに図2,3から推定した1959年から1962年まで4年間の体内量を追加して改変

図4 日本人成人男子群のセシウム137体内量の推移

[出典]Health Physics 71, 322 (1996)

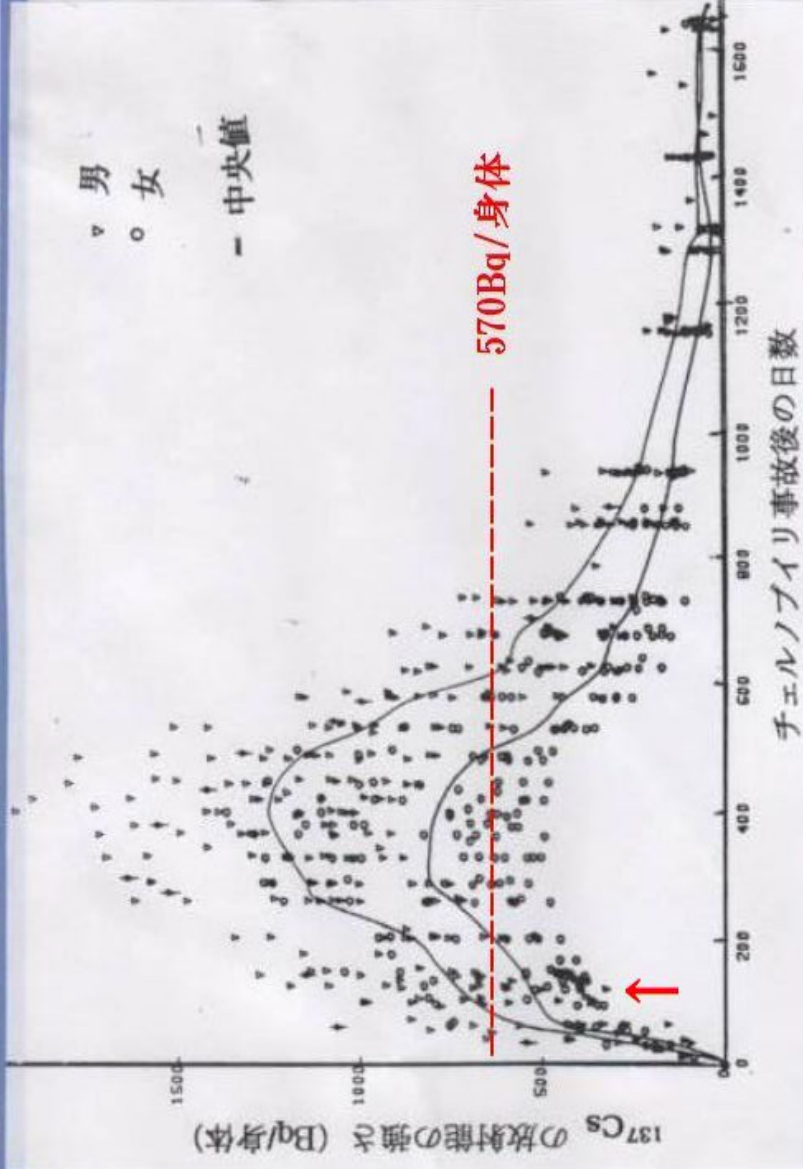


● Cohn et al. ■ Rundo ▲ Huyeke and Oberhausen |—| MacDonald et al.
 Hasanen and Miettinen × Leitnaker et al. ... LASL data
 1Bq = 27pCi

図1 北半球諸国から報告された1956年1月から1966年12月までのセシウム137体内量

[出典]Radiation Research 3、545(1967)

チェルノブイリ事故後のセシウム-137 の体内摂取量の時間変化



被ばく直後から4年半、ブタペストの成人市民にホールボディカウンタでセシウム測定、約1年後に最大値(男1,200Bq, 女800Bq)に達し
3年後にはムシできる程度に減少(半減期は30年) (近藤、1993)

